

コラム①：夏植の植付時におけるイネヨトウの防除対策について

県内全域のさとうきび圃場において、イネヨトウによる被害がみられます。生育初期の被害軽減のため、植付時における粒剤施用と植付後の除草剤等による防除対策を徹底しましょう。

1 発生生態および被害

- (1) 沖縄では年5～7世代を重ね、幼虫は周年を通して発生する（図1）。
- (2) 卵は葉鞘の裏側に卵塊で産み付けられ、1雌当たりの生涯産卵数は400～700卵に達する。幼虫は葉鞘の外側から孔を開けて食入し、生長点を加害して芯枯れを起こす（図2）。
- (3) 初期被害は圃場周辺部で見られ、圃場内でスポット状や畝に沿って被害が拡大する。被害が集中的に起こるため、生育初期に加害されると坪枯れを起こすこともある。
- (4) 被害圃場及びイネ科雑草が発生源となり、新植圃場に侵入する。



図1 イネヨトウ幼虫



図2 芯枯を起こしたさとうきび

2 防除対策上注意すべき事項

- (1) 植付時
 - a 全茎苗は剥葉し、メイチュウ類の被害芽子のある苗は使用しない。
 - b 圃場内外のイネ科雑草は本種の発生源となるため、除去する。
 - c 植付時に土壤害虫の防除を兼ねた薬剤（粒剤）を選択し、植溝施用する（図3）。
- (2) 生育初期
 - a 周辺圃場における本種の発生有無を確認する。
 - b 芯枯茎が発生した場合は、葉鞘に薬剤が入るよう意識し薬剤散布を行う。
 - c 培土時には土壤害虫の防除を兼ねた薬剤（粒剤）を選択し施用する。
 - d 被害の多い地域では、薬剤による一斉防除を行う。



図3 粒剤は散布後、土壤混和する